

J.E.ミレイ《シンデレラ》の孔雀の羽根と唯美主義

ながお じゅんこ
長尾 順子 (清泉女子大学)

発表要旨

14
時
50
分
—
15
時
30
分

松ヶ崎・東キャンパス内
60周年記念館
1F記念ホール

本発表では、ヴィクトリア朝の画家ジョン・エヴァレット・ミレイ(1829-1896)の油彩画《シンデレラ》(1881年、ロイド=ウェバー卿コレクション)について、主に唯美主義との関係性の観点から考察する。ミレイは一般にラファエル前派の画家として知られており、同派を脱退後の作品群は、概して同派時代の理念を捨て大衆に迎合したものだという批判を受けてきた。しかし近年、そうした作品群も含め彼の画業全体を紹介する大規模な個展(2007-08年、テートほか)が開かれるなど、再評価の機運が高まっている。

《シンデレラ》は、ミレイが円熟期に描いたファンシー・ピクチャーの1つで、挿絵入り週刊新聞『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』が、その複製版画を同紙のクリスマス号の付録とすることを目的として、ミレイに制作を依頼したものである。本作には、粗末な身なりの1人の少女が暖炉脇で丸椅子に座っている姿が描かれている。少女は左手に1本の孔雀の羽根を持っているが、これは本来『シンデレラ』の物語には関わりのないものである。本作におけるこのモチーフの意味について、先行研究ではほとんど言及されてこなかったが、発表者は当時のヴィクトリア朝社会で流行していた唯美主義との関係を指摘する。孔雀の羽根は美の象徴として、向日葵や百合の花とともに同主義のシンボルとして扱われてきたモチーフの1つだからである。

ミレイと唯美主義との関わりについては、それがラファエル前派脱退後の作品であるという理由から、唯美主義研究においてはあまり注目されてこなかったが、ミレイ研究においてはこれまでもたびたび指摘されてきた。ミレイの《秋の枯葉》(1856年、マンチェスター市立美術館)は、「美に満ちた主題のない絵」を実践したことで、唯美主義の先駆的作品として知られており、この制作を機に、ミレイは子どもの姿に自身の理想美を見出すようになった。以後生涯にわたって多くの子どもの絵を手がけたが、ロセッティやバーン=ジョーンズのような主たる唯美主義の画家たちが女性の姿を好んで表現したのに対し、子どもをモデルに唯美主義作品を描いたことは、ミレイの特徴としてウォーナー(1999年)やライディング(2006年)らによって指摘されている。

先行研究において、ミレイと唯美主義との関わりは1850年代後半から1860年代後半にかけて描かれた作品を中心に議論されてきており、10年以上のちに描かれた《シンデレラ》が唯美主義と直接結びつけられたことはなかった。しかし、ミレイが子どもの姿に唯美主義的な美意識を見出していたことを考慮すると、本作に孔雀の羽根という唯美主義のモチーフが描きこまれていることは注目に値する。

本発表では、以上の考察を通してミレイの《シンデレラ》の唯美主義的性格を提示する。